
非鉄金属スクラップ卸売業

スクラップは、発生量、需要量ともに増加しており、さらに、販売価格が上昇しているため、各社の売上高は増加傾向にある。

スクラップの発生量は増加しているものの、選別作業に手間がかかり、採算の確保が難しくなる例も増えてきている。これらスクラップは、国内販売から輸出に回されており、中国等の旺盛な金属資源需要もあって、輸出は増大している。

業界概要

当業界は、標準産業分類では再生資源卸売業の中に分類されており、取り扱うのは、銅、鉛、亜鉛、アルミニウム等の非鉄金属のスクラップである。

スクラップは、ニュー・スクラップとオールド・スクラップに大別される。前者は、金属加工工場の生産過程で発生する切削屑、打ち抜き屑、切れ端であり、後者は、廃棄された電気機械、電線、建材等の解体・選別を通して回収されるものである。

これらスクラップの仕入（引取り）に際しては、各企業が定期的に工場や解体作業場を巡回して集荷する場合と、持ち込まれる場合とがある。集荷品を自社の倉庫で、選別、加工処理した後、伸銅メーカー、電線メーカー、アルミニウム地金メーカー等の各工場へ販売する。また、輸出向けスクラップは、専門商社の指定倉庫又はヤードへ納品する。

加工処理の内容は、裁断、圧縮プレス、廃電線の被覆の剥離、溶解等であり、溶解設備をもつ企業では製造業の業態に近い企業もみられる。非鉄金属には、ア

ルミ青銅合金等の合金類が多いが、溶解炉や鑄造機の設備によって、合金素材を分離抽出し、純度を高めたうえで、インゴット（鑄塊）にして銅合金鑄物業者等へ販売する。なお、近年は特殊合金、複合素材等、溶解だけではリサイクルが困難な金属素材も増えているが、これらはそのまま鉍石精錬工場へ販売される。

大阪府における事業所数、従業者数、年間販売額をみると、平成14年で、276、1,301人、958億15百万円で、対全国比は、それぞれ11.5%、11.3%、20.7%である（大阪府『平成14年大阪の商業』、経済産業省『平成14年商業統計表』）。

取引額は増加傾向

国内の伸銅メーカー、アルミニウム地金メーカーのスクラップ需要は増加しており、また、スクラップの輸出も中国等海外の旺盛な需要を反映して増大している。

ニュー・スクラップでは、仕入先である金属加工業者の加工量が持ち直す中、スクラップの集荷量は増加し、また、取引価格の上昇により、金額ベースでは大きな伸びとなる企業が増えた。

オールド・スクラップの発生量も、解体・選別される機械類の増加、産業廃棄物業者の売り込みによって、増加傾向が続いている。

このほか、家電リサイクル法をはじめとする各種リサイクル事業が本格化する中、当業界においても、これら事業に関わり、解体作業等を請け負う例がみられる。

ニュー・スクラップは効率的な集荷が難しくなる

ニュー・スクラップの発生量は全体として増加しているものの、効率的な集荷は容易ではなくなってきた

いる。この背景として、ニュー・スクラップを大量に発生する量産型工場が事業規模を縮小する中、小規模工場への巡回数を従来以上に増やし、小口スクラップの回収に力を入れる必要がでてきていること、府外工場へも集荷に行くものの、その地域の地元同業者の集荷事業との競合も目立つようになってきたことがあげられる。このため、輸送コストと時間がかかる割には、集荷量が伸びないのが現状となっている。

オールド・スクラップは解体・選別が複雑化

製造業等の設備の更新が進む中、解体される古い設備機械装置類が増えており、このほか廃家電や廃自動車のリサイクル事業の一部を請け負う企業もみられ、オールド・スクラップの扱い量は全体として増加している。

ただし、機械類等では、小型・軽量化の進展、電子部品の増加等の中で、部品の中に複雑に組み込まれた金属を取り出す作業が複雑化し、従来以上に手間がかかるようになってきている。また、廃電線の剥離作業等も人手やスペースの確保の点で国内では採算の確保が難しくなってきている。

解体・選別作業においては、エア工具、プラズマ切断機等の専門工具を使用する企業も一部でみられるものの、基本的には手作業が中心であるため、人件費の負担が採算を圧迫している。

このほか、引取に際しては、非鉄金属以外の雑品のスクラップも一緒に引き取るサービスを余儀なくされていることも選別作業を複雑にしている。

輸出は増大

近年、上記のような解体・選別に手間のかかるスクラップはそのまま輸出されるようになった。

この背景として、中国等の旺盛な金属資源需要により輸出向けスクラップ価格が上昇傾向にあることや、中国におけるバーゼル条約（有害廃棄物の国境を越える移動及びその処分の規制に関する国際協定）の適用見直しにより、プラスチック、ゴム、ビニールも有価物となり、解体された電子機器部品類の輸出が可能となったこと、があげられる。

輸出品目は、廃モーター（巻線が再利用される）、被覆電線（銅線が分離・再利用される）が最も多いが、上記のように解体された電子機器（パソコン等）部品も近年、増加している。ただし、解体されていない廃家電製品は現在も輸出禁止品目とされている。

こうした輸出向けスクラップは、専門商社の買取価格が上昇していることや、選別の手間が省けることから、輸出に力を入れる企業は多い。さらに、これまでは国内向けが中心だったニュー・スクラップも輸出に回される例もみられている。

採算は厳しい

銅や真鍮の価格は、海外相場（ロンドン金属取引所）と外国為替相場によって決められるが、スクラップの取引価格も、回収コストや国内需給状況とはあまり関係なく、これら相場にほぼ連動して決められる。

銅の価格は平成16年頃より上昇に転じ、18年4～6月に急騰した後、高止まりとなったが、19年2～3月には再び強含みとなった。アルミニウムの価格は、ユーザー業界である自動車業界の力が強く、国内の需給状況がかなり反映されるため、他の非鉄金属ほど高騰はしないものの、緩やかな上昇傾向をたどっている。

販売価格が上昇しているため、各社の売上高は増加しているものの、仕入価格も上昇していることや、前

述のように、集荷・選別・回収のコストの増大、人件費の負担から採算は引き続き厳しい。

今後の見通し

各社の売上高は当面、好調な推移が予想され、業界全体として明るさが見えてくる。

長期的にみると、金属資源需要の高まり、資源リサイクル事業に関連した業務の増加等、需要面での回復は続くことが予想される。販売面では、回収・選別したスクラップは、国内販売先である伸銅メーカー、アルミニウム地金メーカー等の工場、輸出専門商社の指定ヤードに持ち込めば、当日の取引相場で買い取られ、また、同業者との販売競争も少ないため、販売活動における経営努力は少なくてすむといえる。

しかし、仕入（集荷）においては、ニュー・スクラップは、府内での集荷先の減少や集荷量の小口化、オールド・スクラップは選別・回収の複雑化といった問題があり、採算の確保に向けた経営努力が必要となっている。

当業界では、販売よりも仕入の戦略がより重要といわれているが、以上のように仕入活動が難しくなってきたことが、各企業の事業基盤を不安定にし、経営面での先行き不安感を強めている。

業界団体である大阪非鉄金属商工協同組合の組合員数をみると、現在 64 社（平成 10 年は 116 社）に減っているが、企業数減少の最大の理由は、後継者の不在である。当業界は、家族とパート数名という小規模企業がほとんどであるため、経営者の高齢化や後継者難によって企業数が今後、さらに減少していくことが懸念される。

（松岡 信明）

非鉄金属スクラップ卸売業

	大 阪 府			全 国		
	事業所 数	従業者 数(人)	年間販売額 (百万円)	事業所 数	従業者 数(人)	年間販売額 (百万円)
平成6年	319	1,359	58,318	2,357	10,245	363,808
9年	329	1,361	88,939	2,345	10,169	481,380
14年	276	1,301	95,815	2,396	11,549	462,046

資料：大阪府『大阪の商業』、経済産業省『商業統計表』。

主要非鉄スクラップ品の輸出高の推移(全国)

(単位：百万円、%)

	銅スクラップ	アルミニウム スクラップ	亜鉛 スクラップ
平成16年	23,905(36.0)	6,324(25.1)	365(-4.6)
17年	46,439(94.3)	8,004(26.6)	514(40.8)
18年	82,274(77.2)	12,476(55.9)	813(58.2)

資料：財務省『日本貿易月表』

(注) () 内は前年比。

主要非鉄金属地金価格の推移

(単位：トン当たり千円)

	電気銅	電気亜鉛	アルミニウム
平成16年	356.8	156.6	225
17年	459.8	197.3	251
18年	834.1	423.4	353
19年3月	794.2	427.2	373

資料：日本伸銅協会、日本アルミニウム協会。

(注) 年平均、月平均。